



Title	態度の発達
Author(s)	仲, 真紀子
Description	II部 生涯発達の道筋. 26章 児童期. 4節.
Relation	発達心理学ハンドブック, 東洋; 繁多進; 田島信元編集企画, ISBN: 4571230273, pp.476-477
Issue Date	1992-06
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/44715
Type	book part
File Information	HDP1992_476-477.pdf



4節 態度の発達

特定の対象に関して動機づけられ、一定の仕方で反応する傾向を態度という。偏見や攻撃性のような反社会的な態度もあるし、道徳性や愛他行動のような向社会的な態度もある。態度の形成には、モデリングのような行動の獲得としての側面と、態度を規定する規則や法律についての認識、他者の気持ちの理解など、認知的な側面とがかかっている。

1 行動的側面：モデリング

特定の人（モデル）の行動を観察したり、モデルに与えられた罰や報酬を見ることによって、その行動を獲得するプロセスをモデリングという。バンデュラ（Bandura, 1971）によれば、モデリングの成立は以下の過程を含む。

- (1) 注意過程：観察者はまずモデルに注意を向ける。きわだって力があり、しかも愛情のある人物、たとえば両親、教師、兄弟などはモデルとして選ばれやすい。
- (2) 保持過程：観察者はモデルの行為を保持する。
- (3) 運動再生過程：観察者はモデルの行動を再生する。
- (4) 強化と動機づけ：暴力を知っていても実際にはふるわないというように、獲得された行為は必ずしも遂行されるわけではない。実際に行なうか否かは、その行為がどの程度強化されるか、また動機づけられるかによって異なる。

これらの過程がどのように進むかには発達差がある。注意過程では、幼児・低学年児童では単純に温かく優しい人、権威のある人が影響力をもちやすい（河野, 1988）。だが中学年、高学年になると、専門性や人間性も重視されるようになる（浜名ほか, 1983）。また低学年ではただ1人の人物がモデルとなりやすいが、高学年では状況に応じて複数の人物をモデルとすることが可能になる（塚本, 1985）。保持過程は、モデルの行動をどのように保持できるか、たとえば視覚的な記憶にだけたよるか、ことばに置き換えられた抽象的な表現も可能かなどによって異なる。また運動再生過程は、運動技能の発達に依存する。

2 認知的側面

向社会的態度の1つと考えられる道徳性について、ピアジェは子どもがおはじきで遊ぶようすを観察し、規則の認識に3つの段階があることを見出している。5歳以前の前道徳的な段階では、子どもたちは規則に従うことに関心を示さず、おはじきを投げたりして遊ぶことだけに熱中する。規則の存在に気づくようになるのは5歳以降であるが、この段階、現実的な道徳性の段階では、規則を固定的・絶対的なものとする。行動の善し悪しはその行動の結果によって測られ、たとえば意図的に1つのおはじきをズルした子どもよりも、気づかずに3つのおはじきをズルしてしまった子どもの方が悪いと判断される。だが10歳をこえて第三の段階、自動的な道徳性の段階になると、子どもたちは規則をやみくもに信じることはなくなる。規則は人びとのためであることを理解し、その目的にかなわなければ規則は改変することができることを認識する。

コールバーグ (Kohlberg, L.) はピアジェにつづき、次のような葛藤問題を用いて道徳性の発達段階を定式化した。「ハインツの妻はガンにかかっており、助けるためにはある薬剤師が発明した特殊な薬が必要である。この薬は作るのに200ドルかかるが、薬剤師はこれを10倍の値段、2000ドルで売っていた。ハインツはお金をかき集めたが1000ドルしか集まらない。値段を負けてくれるよう頼み、また後払いも頼んだが、薬剤師は自分がこの薬を発明したのであり、この薬で財をなすつもりだからと言って、売ることを拒んだ。絶望したハインツはとうとうこの店に押し入り、薬を盗んだ」。ハインツの行動に対する子どもの道徳的判断の理由づけから、従順と罰への志向性、規則を道具として用いる志向性、よい子への志向性、法と秩序の道徳、社会的な契約への志向性、普遍的な倫理原則への志向性、という6つの発達段階が見出された(永野, 1985) (49章参照)。

道徳性だけでなく、愛他行動、援助行動の獲得においても、具体的報酬や善に関する紋切り型反応から解放された、普遍的な倫理観や共感性の発達がかかわっている。態度の形成には、態度を行為として示すモデルだけでなく、それを内化し発展させる認知的な過程が重要であるといえよう。